死語の戯れ

松本健一

死語の戯れ

松本健一

筑摩書房

松本健一（まつもとけんいち）
1946年群馬県前橋市に生れる。1968年東京大学経済学部卒。評論家。著書に，『若き北一輝』（現代評論社），『共同体の論理』（第三文明社），『中里介山』（朝日新聞社），『石川啄木』『挟撃される現代史』（筑摩書房），『不可能性の「日本」から可能性の「国家」へ』（河出書房新社）などがある。

書名　死語の戯れ

著者　松本健一

発行日　1985年5月15日　初版第1刷

発行者　布川角左衛門

発行所　株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2—8
郵便番号　101—91
電話　03（291）7651（営業）
　　03（294）6711（編集）
振替　東京6—4123

印刷所　多田印刷

製本所　和田製本

©1985 Kenichi Matsumoto
0095—82195—4604

Printed in Japan

乱丁・落丁本の場合は，御面倒ですが，小社読者係宛に
御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

死語の戯れ　目次

Ⅰ
風景の変容
——一九六四年社会転換説 4
Ⅱ
言葉の「現在」 56
死語の戯れ 71
戯れと死、あるいは再生 98
＊
言語ゲームとしての国家論 123
言葉の定型に潜む「国家」 136
——三島由紀夫から村上春樹、島田雅彦まで
＊
定型の自由という逆説 161
——言葉・記号・肉声

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

「間隙」の物語へ　177
Ⅲ
歌ことばの変容　202
写真と記憶　214
——東松照明にみる戦後写真の軌跡
スポーツの世相史　221
——「努力」型から「趣味」型へ
都市と家族　240
あとがき　259
初出一覧

死語の戯れ

I

風景の変容

――一九六四年社会転換説

プロローグ

もう七、八年もまえの話である。当時、幼稚園に通っていたわたしの娘が、絵本をみながら、これが欲しい、と指差したことがあった。

指のさきをみると、霧吹（きりふき）がある。絵本のその頁には、晴れた日に屋外で遊ぶ子どもたちのさまざまな姿が描かれていた。そして、そのうちのひとりが霧吹をふきながら、目のまえに虹をつくっているのである。

虹というのは、わたしたちをワクワクさせる。雨のあと大空にかかった七色の虹ばかりでなく、海岸の波しぶきの虹や、夏の日にホースで水をまいているときの虹。大人でさえそうなのだから、子どもにとってはそれより数倍も不思議に美しいものなのにちがいない。それを、絵本のなかの子どもがじぶんの霧吹器でつくっているのである。わたしの娘もすぐやってみたくなったのだろう。

よし、霧吹か。そういって、名を教えた。そして、どんな日に、どんなふうに陽にむかって霧を吹けば虹がつくれるのかを覚えるのも子どもの勉強だな、などと教訓じみたことを考えながら、わたしは妻に霧吹器をもってこさせた。すると娘は、こういう手で押すのでなく、絵本にあるような口で吹いて霧をだすのが欲しい、という。

なるほど、そこには手で押す方式のでなく、昔ながらの口で吹く方式の霧吹器が描かれてあった。もちろん、昔ながらとはいっても、わたしの祖母などはよく、口に水を直接ふくんでプーッと着物に霧を吹いていたから、そんなに昔からの器具というわけでもないのだろう。

しかしともかく、その口で吹く方式の霧吹器を見付けてきてやるよ、とわたしは娘に安請け合いした。それからが大変だった。金物屋、文房具店、洋品店、デパート、ありとあらゆるところを探しまわった。友人にも尋ね、はては田舎の母のところへ電話してもみた。どこにもなかった。

あの、小さな水のタンクのついた、鉄製の、口で吹く方式の霧吹器は、いつのまにかわたしたちの身辺から姿を消していたのである。絵本作者もそのことに気づかなかったのにちがいない。おそらくそのひとの記憶のなかでは、霧吹器というと口で吹く方式の固定観念ができていたのであろう。（わたしもそれに近いが。）

記憶のなかの固定観念というのは、妙なものである。十年ほどまえのことだが、赤瀬川原平（尾辻克彦）がわたしたちに、千円札を描いてみてくれ、といった。すると、そこにいた十人中九人が聖徳太子の顔をかいたのである。千円札が聖徳太子から伊藤博文の顔に変わって、すでに十数年たってい

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

た。（一九八四年の暮れには、千円札は伊藤博文から夏目漱石へとまたその顔を変えた。）

ところで、わたしが口で吹く方式の霧吹器を、とわざわざ断って注文すると、考えたあげく返ってくる言葉は、ほとんど同じだった。ほんのこのあいだまでは置いてあったんですがねえ、と。

ほんのこのあいだ——そう、ほんのこのあいだまでは、霧吹器は口で吹く方式だった。テレビは白黒ばかり、白黒をカラー風に見せようとして、眼鏡みたいに、受像器のまえに青いガラスがかけられたことだってあった。風呂はマキ、そのマキ割りが男の子の小遣いかせぎだった。道には、車馬通行止めなどという道路標識が立っていた。

それがいつごろから変わったのだろう。車馬通行止めという用語それじたいは法律的に残っていても、まちに馬はいない。牛車などはもうとっくに消え失せた。時は流れ、世は移る。これは人の世のならいである。しかし、ほんのこのあいだから変わったものの数は、外にも内にもあまりに多い。それに、ほんのこのあいだ、とは、いったいいつのことなのだろう。

契機としてのオリンピック

一九六四年、つまり昭和三十九年、東京はこの年の四月に地方から上京してきたばかりのわたしたちの目のまえで、がらがらと音をたてて変わっていった。「夢の超特急」東海道新幹線が開通し、高速道路、超高層ビルがつくられはじめた。歩道橋や地下道といった新建造物が、ぞくぞくと町中に進出しはじめた。

新宿西口にあった闇市ふうの小路はとりはらわれ、淀橋浄水場もなくなっていった。西口には、広場建設のための鉄板が一面に敷きつめられていた。出来上ったばかりの新宿西口広場が通路というふうに呼び名を変えられるのは、それから四、五年後、全共闘運動と連動した新宿騒乱のあとだった。広場なら座って歌を唄ってもいいが、通路だと立ちどまってもいけない、というのが、法の論理だそうである。

ところで、全共闘運動が一九六八年、つまり一九六四年から四年後に起っていることは、一九六四年社会転換説のリアリティを保証しているようにおもわれるが、どうだろう。それは、戦後生まれの青年たちが一九六四年以後に高校を卒業し、進学のために上京してきてはじめて起こりえた事件だった。しかし、そのことの意味については、もうすこしあとでふれることにしよう。

ともかく、一九六四年の社会転換は、この年の東京オリンピックを契機としている、ということができる。新幹線にしても、高速道路にしても、オリンピックを見物し、そのあと日本の観光を行なう欧米人たちの目に日本の先進国ぶり（欧米なみ）を見せよう、という意図のもとに建設されたからである。ただ、この東京オリンピックそれじたいが、日本が欧米の模倣として追求してきた近代化の最終過程であり、またその歴史的枠組である「近代日本」を脱却しはじめた一九六〇年代の高度成長の象徴なのでもあった。

社会の転換は、風景の変貌をうながした。しかし、社会の転換ということなら、一九六四年よりも一九四五年のほうが大きかったのではないか、という反論もあろう。だが、一九四五年にあったのは、

社会転換というより、政治体制の変化である。天皇制が絶対制的形態から象徴制へと修正されたことに明らかなように、八月十五日にはファシズム体制から民主主義体制への移行があったのである。

また、風景の変貌ということでいうなら、一九六〇年代よりも関東大震災のあった一九二〇年代のほうが大きかったのではないか。二〇年代は現代史の原点であるといわれるように、そこにはすでに、自動車、スポーツ、ダンス、セックスなど二十世紀の新風俗、新文化がすべて出現してきていた。だが、この一九二〇年代の変化は、関東大震災をきっかけとした「近代日本」の再建にほかならなかったのである。大震災によって東京の高層建築がほとんど崩れ落ちたために、森鷗外の邸のあった根岸の観潮楼からは、数十年ぶりに東京湾の潮がみえた、という。その崩壊後の再建である。

この再建後の東京の風景の変貌がどれほど大きなものであったかは、井伏鱒二の『荻窪風土記』の冒頭にでてくる印象的なエピソードによっても推測可能である。すなわち、大震災まえは品川の岸壁をでる汽船の汽笛が、荻窪でボォーッ……ときこえていたのに、震災後はなぜかきこえなくなった、というのである。建物の洋風化と高層化、自動車の増加、空気の汚れなど、原因はいろいろと考えられるだろう。

公害の最先進国

明治以後、日本の社会、文化、風俗、風景はどんどん変わった。政治・経済体制でさえ、イギリス・フランスを模倣しての文明開化、プロシアを模倣しての富国強兵化、ドイツ・イタリアを模倣し

てのファシズム化、アメリカを模倣しての民主主義化、というふうに何度も路線修正を行なってきたのである。

その意味では、明治以後、一九六〇年代までの日本はつねに、森鷗外のいう「普請中」であった。なにのための普請か。日本が先進の欧米に追いつき、近代を実現するための普請である。普請中とは、日本が近代化の過程にあった、ということであろう。明治以後の日本は、そのときどきでイギリス・フランス、プロシア、ドイツ・イタリア、アメリカといったように、その模倣すべき対象、実現すべき近代の理念型（イデアル・ティプス）をとりかえながら、一貫して近代化の道すじを歩んできたのだった。

その一貫した近代化の道すじを、大まかに捉えてみるなら、外におけるアジアから欧米へ、であり、内における農村から都市へ、である。もう少し詳しくいえば、日本の近代化は、先行する欧米を模倣し、それを後から追う形態をとることによって、資本主義化、中央集権化、都市化、工業化、合理主義化、欧米化などといったさまざまな側面をもつことになった。

それがしかし、一九六〇年代の高度成長によって行き詰まりをみせるようになるのである。なぜなら、高度成長というのは、近代の最終過程であって、そこではすでに日本は欧米と横一線にならんでしまったからだ。つまり、欧米はもはや日本にとっての理念型の意味をもたなくなってしまったのである。

このことは、たとえば公害という問題一つをとってみてもよくわかるだろう。公害は、日本が欧米

型の資本主義および工業を後から、それも欧米が二、三百年かかってやってきたことを日清戦争後七、八十年でやってしまったために、加速度的にその弊害を押し出したものであった。六〇年代後半の、水俣病、イタイイタイ病、琵琶湖の汚染、駿河湾のヘドロ、どれをとっても日本は公害の最先進国であった。

たとえば、一九六八年から六九年にかけて、わたしはあるガラス関係の企業につとめていた。船橋工場の総務課がその所属する課である。その仕事のひとつに、公害対策があった。ガラス熔解のための炉からでる亜硫酸ガスと排塵、それに製造過程で排水にまじる鉛、砒素などの有毒物を、法的、経営的、技術的に処理する仕事である。このとき、わたしは技術提携をしていたアメリカの企業に、どのような公害処理をしているのか、と問い合わせたことがあった。すると、返ってきた答えは、わが社は工場が砂漠のそばにあるから、排煙についても排水についても何の処理もしていない、というのであった。

わたしはその答えをきいて、国土の広い国はいいなあ、とおもうと同時に、公害については日本は世界の最先進国なんだな、とおもわざるをえなかった。そのことはつまり、公害問題の解決には欧米を模範としてこれに学ぶわけにはいかない、日本みずからがその解決にあたらなければならない、ということを意味していた。

ところで、一九六〇年代の日本がそうであったように、いま近代化の道を驀進しているアジアの国国は、いずれ近いうちに公害の問題に悩みはじめるはずである。中国の上海工業地帯では、揚子江が

黒く濁り、工場の煙突がもくもくと黒煙をあげている。そして、朝鮮民主主義人民共和国では、無機・合成肥料と無機・化学農薬の大量投下による農業近代化が行なわれているのだ。

農村から都市へ

歴史的枠組としての「近代日本」は、大きくいうと、明治以後の日本が、外におけるアジアから欧米へ、内における農村から都市への移行過程に置かれた、ということである。このことは、「近代日本」のなかで形成された精神が、アジアと欧米、農村と都市、農業と工業、地方と中央などの対立構図のうえに自己の精神的見取り図を置いたことを意味する。

アジアと欧米という対立構図は、たとえば「遅れた」アジアから「進んだ」欧米へ洋行し、また先進国欧米から「文明」を移植するという発想を生んだ。そこでは、「帰朝者」という特殊な精神類型が生まれ、また移植された「文明」が根づかずに剝落する現象がおこった。鶴見俊輔は『戦時期日本の精神史』で、この現象を「フケが落ちるように」と形容している。

ところで、移植された欧米の「文明」が剝落すると、そこに日本回帰といった精神現象が生じる。この回帰現象を、「近代日本」という特殊歴史的な枠組における言葉で呼ぶと、「転向」となるわけだ。つまり、転向というのは、思想が権力からの強制によって変えられる一般現象をいうのでなく、移植された欧米の「文明」——知識人の思想としていうなら、リベラリズム、マルクス主義など——が剝落し、それ以前のエトス（生活的な感情）＝日本へと回帰する病理的な精神現象にほかならない。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo